

ZOCALO 2021 8 ▶ 9

ZOCALO = ソカロはメキシコの都市の広場を意味するスペイン語。埼玉県立近代美術館はアートを通して交流する市民の広場をめざしています。

美男におわす — 増殖する美男の園へ、ようこそ

企画展「美男におわす」
2021年9月23日(木・祝) ~ 11月3日(水・祝)



入江明日香《L'Alpha et l'Oméga》2019年 丸沼芸術の森

9月の開幕を目指して準備が進む「美男におわす」展。どんな展示になるのか、担当学芸員に様子を聞いてみましょう。

Q どんな展覧会ですか？

近世絵画、浮世絵、近代日本画、雑誌の表紙や挿絵、現代作家の作品、漫画など、時代やジャンルをまたいだ様々な男性像が集まります。古くから人々は男性像に理想を投影し、心をときめかせてきました。あるときは聖なる存在として、またあるときは憧れのヒーローとして、あるいは性愛の対象として、さまざまな男性像が生まれてきました。この展覧会は、「伝説的美少年」「愛しい男」「魅せる男」「戦う男」「わたしの『美男』あなたの『美男』」の5つのコーナーから、これまでに表されてきた美少年、美青年のイメージをたどります。



川井徳寛《共生関係〜自動幸福〜》2008年
鎌刈宏司氏蔵
©Tokuhiko Kawai, Courtesy of Gallery Gyokuei



絵師不詳《大小の舞図》17世紀
板橋区立美術館

美術の歴史の中で、「美人画」が女性の姿を中心に描かれてきた一方で、男性を美しいものとして表現すること、見ること、そして語ることには、まだ十分な光が当たっているとは言えません。ライフスタイルや嗜好が多様化し、ひとりひとり異なる「美男」イメージを持つようになった現在、「美人画」ならぬ「美男画」との出会いは、果たしてどのようなものになるのでしょうか。増殖する美男の園へ、ぜひお越しください。

Q 謎のタイトルについて教えてください。

美男でらしやいますね、という意味なのか、美男のにおいをさせているのか…いちおう公式には前者の意味を謳っていますが、後者の意味に取ってもらってもよいと思っています。元ネタは、与謝野晶子の

かまくらや みほとけなれど 釈迦牟尼は
美男におわす 夏木立かな

という和歌です。鎌倉の大仏を「美男でらしやる」と謳い上げ、仏様なれども身近な存在として親しむ詠み手の感性は、今回の展覧会にぴったりということで、タイトルにつけさせてもらいました。お越しになる皆さんそれぞれに、さまざまな美男像を抱いていると思いますので、会場ではいろいろなタイプの美男をおおわす、それをかき分けてもらえたら楽しいですね。

この展覧会、最初は「美男子の美術史」という仮のタイトルで始まりまして。きっかけは2014年から2015年にかけて、島根県立石見美術館で開催した「美少女の美術史」という展覧会でした。この展覧会が好評で、終了後に「ぜひ次は男性版を」という意見が内外から寄せられて、石見美術館がじゃあ次は男性バージョンで「美男子の美術史」を提案してくれました。埼玉はその企画に

便乗させてもらった形です。そして一緒に企画を練る中で実際に作品を探していくと、大人の男性像が多く見つかることに気づきました。「美少年」だと、どうしても中性的な美や年齢が限定される印象が強くなるので、今回は幅を広げて、「美少年」も含む「美男」という形で紹介していくことにしました。

Q 出品作品の中から1点、紹介してください。

朝霞市にアトリエを構える埼玉ゆかりの作家、入江明日香さんの《L'Alpha et l'Oméga》をご紹介します。一見すると日本画のようですが、実際は銅版画をベースにしたミクストメディア作品です。入江さんは、銅版で刷った薄い和紙を切り抜いてコラージュし、ドローイングを施す独自の技法を用いているのですが、コラージュだと言われなければわからないほど、和紙が繊細に貼り込まれています。銅版画という黒一色の印象をもたれる方もいるかもしれませんが、入江さんの画面は色とりどりです。大きな圧力がかかるプレス機で刷ることで、版画ならではの質感と発色が得られるのだとか。

《L'Alpha et l'Oméga》は六曲一双の屏風に仕立てられており、全体の幅は約10メートルに及びます。左右に武者が描かれているのですが、右隻が動とすれば左隻は静。ダイナミックな対比と洗練された描線に引き込まれます。武者たちの肉体には、変容し風化していくような表現がみられますが、彼らはあらがう様子もなく超然としています。まるで壮大な生命の循環を見ているような気分になりつつ、画面の端に目をやると、鳥獣戯画のような小さな生き物たちが描かれているのに気づきます。ゆるい可愛らしさに思わず微笑んでしまいそう。ぜひ会場でご覧ください！

(G.R.+S.Aya.)

研究ノート リアルを見つめて — 上田薫 / 印象派 / 小島喜八郎

当館では昨年、リアリズム絵画で知られる画家・上田薫(1928-)の画業をたどった企画展を開催しました。緊急事態宣言の発令に伴う臨時休館により、残念ながら会期中での閉幕となってしまいましたが、予想以上に多くの方に足を運んでいただきました。

殻からすべり落ちるなま玉子、ぶるんとしたゼリー、光を反射してキラッと光るスプーン——。対象の質感まで鮮明に描いた、写真と見紛うほどリアルな上田の絵画はしばしば、スーパーリアリズムの文脈に位置づけられます。そもそもスーパーリアリズムとは、1960年代後半から70年代に主にアメリカで出現した芸術動向です。上田が抽象絵画に見切りをつけ、リアリズム絵画へと転向したのもちょうどこの時期にあたり、上田は日本におけるスーパーリアリズムの先駆者とされています。一方同じ頃、自身の表現について模索し、上田と同様にリアリズム絵画へと向かおうとする日本人画家がいました。当館の収蔵作家である埼玉出身の画家・小島喜八郎(1935-2008)です。

小島は高校卒業後、近所に住んでいた画家・白木正一(1912-1995)、早瀬龍江(1905-1991)夫妻のもとで絵画を学び、抽象絵画や不穏な空気の漂うシュルレアリスム的な絵画を制作します。1970年には連作「紙の上の世界」を制作し始めますが、シリーズ名が示す通り、そこに描いたのは現実ではなく薄っぺらな虚構の世界でした。自身の心境を投影した閉塞感のある表現に限界を感じた小島はその後、試行錯誤の末、「思考や感性を停止して没我的に映像を写し取る」手法、すなわちスーパーリアリズムの表現に至ります。そうして1978年に描き始めたのが、小島の代表作である「草」シリーズです。

小島が描く草の姿は、動きのある上田の作品とは対照的で、静止したイメージのように感じられます。しかし、小島は時間の経過にしたがって徐々に変化する草の表情に着目しており、その様子を対比してとらえているのです。朝と夕方、晴と曇、夏と冬といった時間の対比を描くにあたり、小島は朝から晩まで草むらをとって見つめ、定点観測して写真に収めました。興味深いことに、対象を同じアングルから時間帯を変えて複数描くという方法は、印象派の巨匠クロード・モネ(1840-1926)によっても実践されています。この方法の一致は、おそらく偶然ではないでしょう。

小島はやがて、絶えず動き続ける自然の様子に関心を抱くようになり、揺らぐ植物を描こうと「風」の連作に取りかかります。こちらも小島自身が撮影した写真が元になっていますが、克明に描かれた「草」とは異なり、風に揺られる木々や草花の様子がソフトフォーカスでとらえられているのが特徴です。「風」の画面上に表れるスピード感のある筆致や曖昧な輪郭線は、やはりどことなく印象派の絵画を想起させます。考えてみれば、写真技術が発達し、写真が表現として用いられるようになった19世紀に登場した印象派の画家たちは、光に照らされて絶えず表情を変える自然の姿を自身の知覚を頼りに描きとり、人間の純粋な視覚世界をカンヴァス上に再現しようと試みた先駆的存在でした。彼らが絵画において取り組んだ問題を引き継ぎ、マスメディア時代ならではの視点で実践したのが、小島をはじめとする現代のスーパーリアリズムの画家たちだったのではないのでしょうか。

最後に、あらゆるもの一瞬をとらえたスーパーリアリズムの作品は、鑑賞者に対し瞬時に衝撃を与えるものですが、その制作過程には作家が対象を見つめ続けた膨大な時間が存在していることを忘れてはなりません。メディアが多様に発達し、否応なくそれらを見せ続けられている現代の私たちは、ときに見つめることを忘れてしまいます。こんな時代だからこそ、自分自身の「見る」行為について再考してみないかと、彼らは私たちに問いかけているのかもしれない。(S.Ayu.)

執筆にあたっては以下の文献を参照しました。
『小島喜八郎画集』ポイントライン、2005年



左上：小島喜八郎《草(朝) 同一の草の一日》1988年 埼玉県立近代美術館
右上：小島喜八郎《草(夕) 同一の草の一日》1988年 埼玉県立近代美術館
左下：小島喜八郎《9月の庭にて》2005年 埼玉県立近代美術館